

佐藤 泰介 (東京工業大学)

思い返せば田中先生とのご縁は今から30年以上前、当時の電子技術総合研究所に就職したときが始めでした。私が就職した頃世は人工知能ブームに向かう時代で、同じ研究室の先輩として田中先生は日本の自然言語処理研究を立ち上げようと毎日奮闘されていました。Lispで書かれたLINGOLという自然言語処理システムをああでもない、こうでもないと楽しそうにいじっていらっしやっただのを今でも鮮明に思い出します。その後田中先生は東工大に移られ、自然言語処理もコーパスを使った統計的手法全盛の時代へと変わりました。私も田中先生の後を追うように東工大に移りましたが、東工大でも先生が相変わらず研究科長など忙しい役職にもかかわらず、ひょうひょうと自然言語研究を楽しんでいらっしやるのを見て、ああ、やはり田中先生は田中先生だなと強く思ったのを覚えています。先生の学問的業績と暖かい人柄に惹かれてか多くの優秀な学生さんが先生の下に集まり、その後自然言語処理の中核的研究者として活躍されているのを見ると、教育者として人を育てるのも上手であったことを実感いたします。先生のご冥福をお祈りするとともに、お弟子さん達のこれからの活躍を期待しております。

松本 裕治 (奈良先端科学技術大学院大学)

心から親愛の情を込めて田中さんと呼ばせていただきます。田中さんと初めてお会いしたのは、私が電総研への就職を希望して見学に行った修士2年のときでした。電総研入所の後、迷わず推論機構研究室への配属を希望し、故 淵一博室長の下で、田中さんと一緒に研究を始めることになりました。最初に紹介していただいたvan EmdenのLogic Programmingの基礎に関する論文の感想を話しに行ったときに、「もう読んじゃったの？早いね」と言われた笑顔を今でも覚えています。以来、ずっと田中さんが私の研究の指針であったように思います。田中さんが東工大へ移られ、田中さんのいない電総研はつまらないと、英国への留学やICOTへの出向を希望し、違う組織に所属しながらも、何か思いついたり悩んだりするときに、真っ先に話をしたいと思うのは田中さんでした。

その後、私は、京大そして現在の奈良先端大へと物理的には距離を置くことになりましたが、いろいろな学会や田中研究室と毎年開催している合同研究会など、お会いする機会ごとにそのときどきに取り組んでいた研究の話をするのが楽しみでした。「それはおもしろいね」、「松本君、よく頑張っているね」と言っていたのがうれしくて、その言葉を聞きたいがために研究を続けてきた

ような気がします。3月にお会いしたときに、4月から北陸先端大に移ること、奥様も一緒に金沢に住むことになること聞いて、それはよかったですねと話したのが最後の会話でした。もっともっと話したいことがあったのにどうしてという思いで一杯です。ご冥福を心よりお祈りいたします。

徳永 健伸 (東京工業大学)

田中穂積先生が東工大に来られたのは私が修士課程を修了した1985年のことで、私と田中先生はちょうど入れ違いでした。修士課程修了後、企業に就職した私は会社の空気が肌に合わず、時間を見つけては博士課程に進学した同級生の研究室を訪ねていました。それが当時できたばかりの田中先生の研究室でした。田中先生とお会いしたのは、そのときが初めてでしたが、会社への不満を愚痴る私にニコニコしながら助言してくださいました。これがご縁で私は田中先生の研究室へ博士として入学することとなり、以来、田中先生が東工大を退職される2005年3月まで、東工大の同じ研究グループと一緒に研究・教育にたずさわらせていただきました。学生を育てることに非常に熱心で、どんな学生に対しても声を荒げることなく忍耐強く指導されていたのが印象的でした。先生の温厚な人柄のなせる技でしょう。研究に関しても柔軟な思考と広い心で異分野の研究者との交流に熱心でした。先生の幅広い分野の研究者との人脈は、2001年から代表者をされた学術創成研究「言語理解と行動制御」の研究分担者の顔ぶれによく表れています。先生の急逝はとて残念ですが、先生の意思は先生が育てられた教え子達に引き継がれるものと思います。田中穂積先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

白井 英俊 (中京大学)

私は卒業論文および修士論文の研究テーマとして自然言語の処理を選んだ。しかし、その当時は周りのほとんどの先生方が「人工知能」はモノにならない(から研究テーマとするのはやめたほうがよい)という環境であった。その私にとって、その当時の電総研の推論研究室の研究活動、そしてその室長であった田中先生は、まさに研究の指針を与えてくれるものであった。今から見ればオープンソースの走りといえそうな拡張Lingolなど、さまざまな研究の刺激をいただいた。田中先生が東工大に移られても、「自然言語理解」という本の一章を分担させていただくなど、いろいろな機会を与えてくださった。とても感謝してもしきれないほどである。

先生が東工大を退職された後、縁があって今年の4月まで私と先生は中京大学で同僚となった。同僚としての